

視点

ウクライナと 38年前のカンボジア

ロシア軍のウクライナ侵攻により多数の犠牲者が発生し一般市民まで拡大、国外に逃れる避難民は300万人超とされる。

ところで、私は38年前の1984年、姫路赤十字病院外科在勤中に、赤十字国際委員会（ICRC）派遣第12次在タイ・カンボジア難民救援医療班日本班長として、タイ・カンボジア国境でヨーロッパからの約15名の医療スタッフと共に3ヶ月間難民救援医療に従事した。隣接する2キロ四方のカオイダン難民キャンプに収容された4万人のカンボジア難民の診療が主目的だったが、実際には内戦が続くカンボジアとの国境線から数キロしか離れておらず、地雷や銃撃等で負傷した兵士等が一度に4人搬送可能な救急車で次々と運び込まれた。時折爆発音も聞こえてきた。1日平均手術件数は18件、最多は46件に達した。手術室には手術台が4台あり、2～3人の外科医がすべての手術を原則1人で行った。地雷による下肢の切断が3ヶ月間に30件、粉々に砕けた自分の足の骨が身体中に突き刺さった例もあった。銃創は、頭部・胸腹部・四肢等で、眼球摘出も行った。まるで野戦病院の有様で足を切断した人が常に何人も入院していた。

この凄惨な光景が現在のウクライナで繰り返されている。38年前にタイ・カンボジア国境で出会った、足を失い、家族を失い、祖国を失ったカンボジアの人たちの不安と絶望・悲哀に満ちた表情を、私は決して忘れることはできない。世界平和を心から願う。

（元カンボジア難民救援医療班）